

# 状況を表現として理解すること

津守 真

普段は人々が互いに理解し合っていて動いているように思える保育の場で、何かできことが起きると、私をも含めた職員の考え方や対処の仕方をめぐって、職員間でも親との間でも、見方が少しずつ違っていることを発見することがある。

こういうときは、普段あまり気にとめずに過ぎていたことをもう一度点検しなおすよい機会である。その場合、これはだれかが悪かったために生じたかと固定して考えてしまうと、対立の感情や自責の感情を拡大することになり、状況の本質を理解することが妨げられてしまう。

複数の人々が生きる保育の場をもう一度見直してみると、そこは、それぞれの人が自己を形成する努力をしている場である。自分とは違った風に感じ考えるのも、その人の生涯の形成の努力のひとつの過程である。私の感じ方考え方もまた同様であって、だれもが自

分の絶対性を主張することはできない。状況は、そこに直接間接にかかわる複数の人々の自己（自我）形成の努力・過程の力動的なからみ合いの表現として見ることができるのではないか。

ひとりひとりの子どもの内的理解のみでは足りない。複数の人間がつくり出す状況を考えねばならない。そして、ひとりの子どもの行動を内的世界の表現として理解しように、表現としての状況をどう理解するかが課題となる。

状況は外的観点から考えられやすいが、状況を人間のものとして見ることができるのは、私とその状況にかかわるときである。状況には複数の人々がかかわるが、私もまたその中のひとりである。私は状況の一部であるが、私のすべてが状況に巻き込まれるのではない。私は状況にかかわりながら、その外に立って、状況をなう者である。状況にどのような向かうかをきめる私がある。そのことはどの人にも同様である。状況のない方はそれぞれの人に委ねられている。

かくて、状況は、それぞれの人がどうかかわり、またどうになうかによって、瞬時に変化し、たえず力動的に変化しつづける。

最近、私の養護学校で、何人もの子どもが公園や道路に外出したが、そのことをめぐむ問題が取り上げられたことがあった。外に出るときには職員がついてゆくが、それには事故の危険も伴っている。先日、事故に近いことがあって、私は学校での外出を禁止した

方がよいとすら考えた。しかし、生まれたときから都会の高層住宅の一室の中で過ごしてきた現代の子どもの中には、外出しないで一日を過ごすことなど実際には不可能に近い場合もある。

こういう状況の中で、ひとりの職員が思い切って工夫し、保育室の前の小さな庭にプールを出し、巧技台の梯子や滑り台を組み合わせ、ホースを三本引いて噴水や流水の小遊園をつくった。環境をつくるということも、せっぱつまった状況から生まれる。

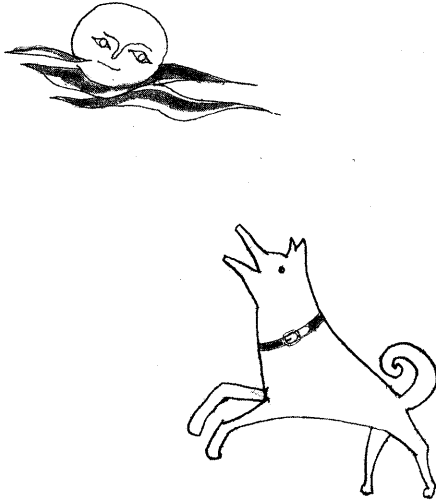
いつも外出したがるT夫が朝来てすぐに服もパンツも自分で脱いで、そのプールに飛びこんだ。それほど熱心に遊んでいたのに、二十分もするうちに活発な大きい子たちがそこで遊びはじめると、T夫はそれに抗議するのでもなく、すつとその場をぬけてしまった。普通だったら感じないほどの他人が近寄る気配をこの子たちは脅威に感じていることを、私は傍にいてひしひしと感じさせられた。

そしてT夫はだれも人のいないところを選んでしまった。もしも私がついていかなかったら、この子はふらふらと外に出ていったろう。私がしっかりと声をかけていると、こちらを見てその場を確かめる。私はT夫との交流がとぎれないように一所懸命になる。こうして人気のない静かな場所で二人だけでいると、この子の弱い自我の受けた傷が癒されてくるのがわかる。

保育の危機に立たされて、そこにかかわる大人たちが保育者としての自我の形成にエネ

ルギーを注ぎ工夫して努力していることが、新たな状況を展開させる。それによって問題が解決したとはいえない。けれども、新たな状況の中で、保育的關係が新しく作り直され、子どもの理解も新たにされる。

多くの人たちのそれぞれの生きる努力の中から生れているのが、現在おかれている状況である。現在というのは、何と奥が深いことか。人間關係の感情の渦に巻きこまれるだけでなく、状況を複数の人間の自己形成の表現として理解するとき、それは知的關心の対象となる。



(愛育養護学校)